～ゼミの１年間で得たもの
サービスラーニング報告会で得たもの～

社会福祉学部　社会福祉学科２年　垣内　雅貴
はんだまちづくりひろば
岡本ゼミ

私ははんだまちづくりひろばで活動を行ったが、私自身、高齢者分野にも興味があったが、社会福祉協議会の仕事にも興味があったのでお世話になったのである。１０月のフェスタに向けて私たちのグループでは企画を考えていたが、思うように案が見つからず見つかったとしても欠点があって振り出しに戻り、１からのスタートで作り直したりして、改良に改良を重ねてここまで来た。思う様にいかなくて焦りもあったりして、このままで大丈夫なのかと思ったくらい。職員の方から色々とアドバイスを頂き、実現に向けて手を差し伸べてくれたおかげもあって、最終日で完成に辿り着けた。凄く大変で辛い事ばかりで投げ出したくなった時もあったが、達成感は大きく良い経験ができた。

そして、１０月のフェスタでは、思った以上に多くの方に来て頂き良かった点や改善点もあったが、これからもはんだまちづくりひろばの方ともう一度頑張ってやっていきたいと思ったのである。たったの６日間であったが内容の濃い時間だったと思う。

「成長したこと」「気づいたこと」を述べたい。成長したところは、物事を最後までやり切れた事や皆と話し合い提案を出し合うことで結束力が高まって協調性が身についた所である。話す力が身についたことが大きく成長したと考えている。（まだまだこれからですが。）気づいたことは、サービスラーニングでは、日程を詰めすぎて自分たちグループで考える時間がなかったことである。こういう所も改善をしていくべきだと思った。はんだまちづくりひろばでは、企画を考える中で視野が広がった、班で話し合うようになり絆が深まったと思う。

はんだまちづくりひろばでは、活動のひとつに中間支援があり、半田市を活性化させることがあった。それを念頭に置いたボランティアの斡旋やイベントの企画などを行っている。活動先では市民の生きがいややりがいの発見をしてもらうことを目的としてセカンドライフフェスタも行っている。その中でもイベントを通してひとつの目的に対して意見を出し合う地域円卓会議が行われている。活動先では広報活動も行っており、市民に呼び掛けている印象がある。しかし、若者には知名度が低く参加してもらえない現実があることを知った。これからの街を変えていくのは私達若い世代が先頭に立って引っ張っていかないといけないと思う。しかし、知名度があがらないのはなぜだろう。これから先も課題になってくると考える。１０月のイベントでは、半田市内の高校生も出店で参加していたが、それ以外の若い人はおらず、子ども連れが多かった印象があった。

～終わりにゼミの１年間を振り返ってみた～

２年生でゼミになり、不安の方が多かった。１年生の時に仲の良い友達とは違うコースになり、後悔も少しあったが、自分の将来のためだと思い前向きに考えた。ゼミが発表された時に知っている子はいたが、ゼミでは自分から話してゼミに慣れることに専念した。

徐々に友達ができて充実した毎日であった。ゼミでは発表する機会が多く話す力が付いたと考える。そのおかげで、講義で発表するときでも変に緊張せず、成長しているなと実感している。１年間でこんなに成長するのかと思ったくらいである。夏休みには現場での活動も始まり、他の人には経験のできない体験が出来たし、人との繋がりもより強くなったような気がした。活動先とはこれから先も繋がって完成に近づけるようにしたいと思う。時間も限られてくるとは思うが、最後の最後までやりきる。

　最後になったが、岡本ゼミで学んだこと・力の付いたことを自信に持ち３年生４年生でも成長していきたいと考える。次のゼミでも自分らしさを忘れずにやっていきたい。

福祉の専門職員に求められること

社会福祉学部　社会福祉学科２年　冨永 晃希
活動先：はんだまちづくりひろば
岡本ゼミ

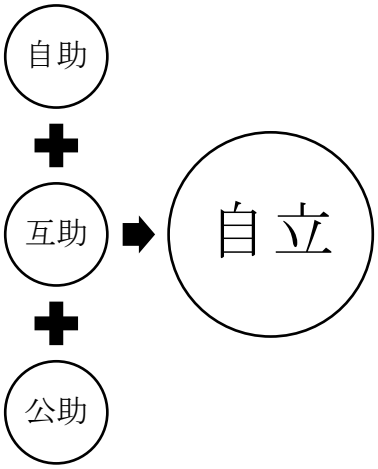
　この一年間は私にとって変化と課題発見の年だった。
私のサービスラーニング先は、「はんだまちづくりひろば」である。私ははんだまちづくりひろばの活動のひとつである中間支援に興味を持ち、活動を希望した。中間支援とはNPOを育て、応援する活動である。資金や資源の提供を行う。また、経営主体としてマネジメントを行う場合もある。私は、福祉現場で働く人への支援を行いたいと考えていたので、中間支援に大きな魅力を感じた。事前にはんだまちづくりひろばの活動に参加すると、はんだまちづくりひろばのミッションは半田市を活性化させることであり、それを念頭に置いたボランティアの斡旋やイベントの企画などを行っていることが分かった。交流イベントとして地域円卓会議を行っている。これは、２ヶ月に一度、半田市をよくするための話し合いを、地域住民を集めて行うというイベントである。参加者の年齢層は中学生から高齢者まで幅広く、職種もフリーターから教師まで多種多様である。

　実際のサービスラーニング活動中には市民に生きがいややりがいの発見をしてもらうことを目的とした、セカンドライフフェスタ＆あいちさんフェスタ in 半田の準備に携わった。私たちはセカンドライフフェスタ＆あいちさんフェスタ in 半田を通して小学生から中学生の若い世代にはんだまちづくりひろばの魅力や、活動内容を知ってもらう必要があると考えた。そこで、若者に浸透しやすいように情報をゲームという形に集約し、これを出展した。

　しかし、6 日間という短期間の中、ゼロから出展物を製作する必要があり、さらには、『はんだまちづくりひろばの魅力』を『わかりやすく』かつ『面白く』『伝える』必要があり、非常に難航した。
　これらの経験を通して私は、グループワークを行う際にグループ内で起きた問題を手当たり次第に着手するのではなく、複数の中から優先度を作り、順序だてて解決していくことや、活動に取り組む前に全員の意思確認と意思統一を行うなど、負担を分散させ誰もが活動しやすい環境を作ることが大切だと感じ、今後グループワークを行う際はこの点に留意して行うべきだと感じた。
　また、はんだまちづくりひろばの地域交流イベントを通して、住んでいる地域が同じで

も年齢が遠い人や立場が違う人は接点を持ちにくく、地域のつながりが衰退している現状があることを知った。

待機老人の増加や、無届の高齢者施設などが蔓延している今日において、高齢者でもある程度の自立した生活を送る必要性がある。自立とは一人ですべてのことを行うという意味での自立ではなく、周りに協力を求めながら、助け合い生活していくことだと私は考える。介護保険の第一人者である池田省三は自立について「なにか問題が発生して、解決を迫られたとき、まず求められるのが自助で(中略)これに家族隣人が手を差し伸べる、これがインフォーマルな支援でこれが互助。自助、互助でカバーしきれないとき、システム化された自治組織が支援する」と言っている。自立した生活を送る上で、自分でできないことは他者に頼ることで解決の兆しが見えるのだが、このままではその互助の段階がなくなってしまうのではないだろうか。待機老人の増加や、無届の高齢者施設などが蔓延し、増加している昨今の状況において、自助、互助、公助のどれかひとつがかけることは、致命的である。



地域にたいする福祉の専門職員の役割はこの、衰退する地域のつながりをつなぎとめることであり、今後の課題である。福祉の専門職員は公助で互助を包み込みケアするような政策が求められるのではないだろうか。

参考文献

『特定非営利法人北見 NPO サポートセンター』アクセス日 2016/12/23
http://www9.plala.or.jp/kitami-npo/tyukan.html
『中間支援組織の活動実態』アクセス日 2016/12/23
http://www.npo-homepage.go.jp/uploads/h13b-2.pdf
『厚生労働省　地域包括ケアシステム』アクセス日　2016/11/25
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/

つながった一年

社会福祉学部　社会福祉学科 2年花村映理子
活動先： はんだまちづくりひろば
岡本ゼミ

私はこの一年間を振り返ってみて、様々なことを体験し学んだ。サービスラーニングでは新しい視点から多くのことを発見することができ、多くのつながりを知った。本レポートでは、今までの活動を通しての気づきや成長、学びを前期、後期を通して振り返っていきたい。

初めに、前期のはんだまちづくりひろばでの活動を振り返ってみると、とても大変で内容の濃い６日間であった。サービスラーニングが始まる事前学習の時点で、はんだまちづくりひろばでどのような活動がしたいかが定まらずに初日を迎えてしまったため、チーム４人での活動目標決めから始まった。しかも、４人の活動希望が違ったり、はんだまちづくりひろばの行う中間支援という言葉にとらわれ過ぎて活動にどう活かしたらよいか考えすぎたりしてしまい、活動目標を決めることに丸一日を費やしてしまった日もあった。その後、試行錯誤を重ねたり、担当の方にアドバイスをいただいたりしながら、チームトミーでの活動目標は「若者にはんだまちづくりひろばのことをゲームを通して知ってもらう」に決まった。そして、すごろくをベースとしてオリジナルのゲーム作りを行ったが、決められた期間の中で企画をこなすことの困難さを学んだ。ゲームを作成する際に、はんだまちづくりひろばのモットーである、「半田市をよりよい町に」というという視点から実際にあった半田市の住民の困りごとをゲームと組み合わせて作成したが、困りごとに対する解決方法案がメンバーだけではどうしても思いつかず悩んでいたことがあった。そんな時に担当の松本さん、小池さんや他の職員さんがアドバイスをくださったりして、よりゲームの面白みを増やすことができた。その時に、作成してゆく中でアドバイスをいただくなど、良い意味で周りの方々に頼ることも大切だと思った。

振り返ってみると、サービスラーニングの六日間を、はんだまちづくりひろばで活動したが、本当に今まで知らなかったことを学び、得ることができた。ゲーム作りは本当に大変で、チーム４人で意見を出し合っているうちにすれ違いが起きたり、口論になったりする場面もあった。また時にはゲームの完成の見通しが立たずに４人で悩むこともあった。けれど、サービスラーニングを終えて感じたことは、達成感だけでなく、このゲームを作成するにあたって、チームの４人だけでなく、担当職員の方々など沢山の方々の協力があったからこそできた。ゲームを作成していた６日間では、チーム４人で必死に作業を行っていたせいで気づくことが出来なかったが、はんだまちづくりひろばでの活動後に参加した半田市のフェスタでゲームを展示した際に、実際にプレイしていただいた方に、に「すごいね」や「面白いことやっているね」と言われ完成してよかったと思うと同時に、ここまで完成させることが出来たのは職員の方々のアドバイスや見守りがあったからこそではないかと気づくことができた。また、ゲームを作ってゆく中で、本当に多くの方とのつながりができていたことにも気づいた。私たちを担当してくださった職員の方以外にも、試作段階からアドバイスをくださったまちひろの職員の方々やCラボの職員さんなどゲーム制作に参加してくださった方が今でも応援してくださっていることを知り、これからのゲ

ームの改良も力を入れていかなければと思う。

後期のぽっかぽかでの活動の中では、前期に続けて、さらに深めてゆきたいことを学ぶとともに、前期の活動の振り返りにもなり、よりはんだまちづくりひろばについて知ることが出来たと感じた。前期の報告会の中で取り上げられたり、コミュニティー・ユース・バンク momo の木村さんが言ったりしていた、人材不足という大きな問題だが、人材不足などについては一年時の授業などで学んできていた。しかし、サービスラーニング前までは知っている程度で関心もほとんどなかった。けれど、実際に現場の方の話や、現場で中高生へ向けて情報を発信する側になることにより、さらに身近に感じることができ、自分の中での印象が大きく変化した。また、２年後には就職しているだろう私たちの為にも人材不足や若者の参加問題は重要なことではないかとサービスラーニングで強く考えるようになった。若者の活躍する場所や居場所がどんどん少なくなってしまっているのではないだろうか。

そして、研究してゆく中で感じたことは、はんだまちづくりひろばは若者の参加が他の場所と比べてとても多いことだ。職員の方々も若い方が多いが、はんだまちづくりひろばが開催する円卓会議には中高生が多く参加し、その他の場所やイベントにも、中高生などの若者が多く参加していた。私も円卓会議に参加してみたが、その場にまた参加してみたいと思えるイベントだった。はんだまちづくりひろばは円卓会議などで居場所づくりをするだけでなく、全体が居場所になっているのではないのだろうかと研究を通し感じた。

まとめとして、この一年で私は学ぶ姿勢が大きく成長したと感じる。何事にも受け身だった自分が、積極的になってきていることがリフレクションシートを振り返ってみると分かる。この成長は、はんだまちづくりひろばで自分たちが活動を一から提案し、やり遂げたからこそではないかと考える。また、人とのつながりも、受け身でのつながりはすぐになくなってしまうけれど、積極的なつながりはずっと残るということである。そして、課題としては、やはり人前で発言する積極性は、まだまだこれから鍛えていかなければならないと痛感した。また、チームトミーのリーダーとしてもあまりメンバーを引っ張れていなかったので、リーダーシップをとってゆけるようになりたい。最後に、サービスラーニング全体を通してみると、活動、報告、研究ととても忙しく大変なことばかりで慌ただしく過ぎていったことばかりだったけれども、それ以上に得るものがあったり、自分の成長を知ることができたりする一年であった。私たちのサービスラーニングはこれからが本番なので、これからもはんだまちづくりひろばの方々とチームトミーで協力し、ゲーム改良を進めてゆきたい。

学生の自主性と行動力

社会福祉学部　社会福祉学科２年　間渕敦也
活動先：はんだまちづくりひろば
岡本ゼミ

私は、サービスラーニングを通して、学生に大切な「自主性」と「行動力」について学ぶことができた。

私が思う自主性というものは、誰かの指示を待つのではなく、自分から積極的に動くというものである。

行動力については､自分が考えたことや感じたことを､そのままにしておくのではなく、実際に行動に移す力のことである。

なぜサービスラーニングで、この自主性と行動力の大切さについて、気づくことができたのだろうか。それは、自分が活動先だった、はんだまちづくりひろばの職員さんたちに受けた影響が、とても大きいからである。

はんだまちづくりひろばでは、職員さんたちが私たちに指示を送るのではなく、学生の私たちで考えをまとめて、成果を出させるという形をとっていた。つまりは、自分たちで様々なことを考えさせる、想定させる、協力させるということを大切にしていた。活動当初の私たちは、そのことに気づくことができず、職員さんたちの指示を待っている状態であった。「指示をもらわなければ動けない」「何をしてよいのか分からない」というように完全に行き詰っていた。そこで私たちがとった行動は、「自分たちから動こう」「とにかく行動に移してみよう」というものである。

どのような行動が職員さんたちにとって満足のいくものになるか、私たちの考えや提案は否定されないか、または否定されそうなポイントはないか、様々な立場から考え、起こりうることを想定し、行動に起こす。このことが、はんだまちづくりひろばでのサービスラーニングにおいて、最も大切になると私たちは考えた。

はんだまちづくりひろばでのサービスラーニングの目的や要点など、改めて整理した私たちは、その後の活動をスムーズに進めることができた。活動最終日には、私たちにとって、または職員さんたちにとっても、満足のいくサービスラーニングになったと振り返ることができたのである。

私は、このサービスラーニング全体を通して「自主性」と「行動力」の大切さについて学ぶことができてよかったと感じている。その理由は全部で二つある。

一つ目は、地域や市民活動において「自主性」と「行動力」は大いに生かせるからである。はんだまちづくりひろばでは､中間支援というものを仕事の一つとしてあげているが、この中間支援というものはどういうものなのか。私たち若い世代のものは、理解できていないところがある。また、はんだまちづくりひろばは、普段どんな仕事をしているのか、何をするところなのかなど、若い世代のものにあまり知られていないと感じている。

そこで若い世代のものに、もっとはんだまちづくりひろばを知ってもらうために、はんだまちづくりひろばが行っている活動がある。

その主な活動としてあげられるのが、地域円卓会議とセカンドフェスティバルである。地域円卓会議では、いろいろな世代の人たちが集まり、テーマに沿ってその人の想いや、

意見を交換する場として利用されている。みんなで話し合うことで、その世代の想いが初めて分かるのである。新たな発見や地域を知る上でとてもいい機会になるので、若い世代のものに、積極的に地域円卓会議に参加してもらいたいのである。セカンドフェスティバルでは、市内の高校生や、NPO 団体がそれぞれのブースをもち、それぞれの仕事内容や活動を知ってもらうというものである。私も実際に参加してみて、新たな発見があってセカンドフェスティバルは、とても楽しいものであると認識することができた。

これらの活動に、このサービスラーニングで学んだ「自主性」と「行動力」を生かして実際に参加をするというのが大事になるのである。また機会があれば友人なども誘って参加をしたいと考えている。

二つ目は、「自主性」と「行動力」を学ぶことで、人として成長することができたなと感じているからである。この「自主性」と「行動力」はこの先行う実習または、社会にでる際に、必ず必要になることだと感じている。その必要なことを、学生のうちに学ぶことができてとてもよかった。「自主性」と「行動力」が大切だと認識した上で、実際にこの「自主性」と「行動力」を大学生活の上で、または地域や市民活動において、自分の力で発揮できるように心がけていきたいと考えている。

一年間を通して、サービスラーニングの計画、活動、振り返りが、自分にとっていいものになって本当によかった。サービスラーニングの活動先であるはんだまちづくりひろば、一緒にサービスラーニングを行った仲間、先生に心から感謝をしたい。